

「非変化」のナルと Turn Out

田岡 育恵

情報科学部 情報メディア学科
(2007 年 9 月 19 日受理)

Naru and *Turn Out* that Do Not Refer to Change of State

by

Ikue TAOKA

Department of Media Science, Faculty of Information Science and Technology

(Manuscript received September 19, 2007)

Abstract

Naru is a Japanese verb which typically refers to change of state, but sometimes *naru* does not involve any transition. Sato (2003) classifies such forms of “*naru*” into calculational/inferential and interpersonal. *Turn*, an English verb of change, also does not always refer to change when combined with *out*, i.e. *turn out*. This paper compares *naru* and *turn out* that do not have transitional interpretation. Unlike interpersonal *naru*, *turn out* is not restricted to conversational context and can be combined with the negative *not*. Different from calculational/inferential *naru*, *turn out* does not involve any framework based on which some calculation or inference is made. Another difference is that *turn out* can express instantaneous cognition. Although *naru* and *turn out* both express a resultative state, *naru* tends to imply process of things more than *turn out*.

キーワード; 変化, 認知, 伝達効果, 対人的, 過程, 結果的

Keyword; change of state, cognition, communicative effect, interpersonal, process, resultative

1. 変化動詞に見られる「非変化」

池上(1981)が指摘するように、日本語はしばしばナル的な言語であると言われる。¹⁾ナルは何らかの変化を表す動詞であるが、「変化」が考えられないところにまでナルが使われることがある。佐藤(2003)では、自動詞ナルの「非変化」の用法を論じ、(1a), (2a)の各例は、通常の「変化」を表すものとして解釈することも不可能ではないが、「です」を用いた(1b), (2b)の文とほぼ同じ意味の「非変化」の解釈も可能だと述べている。²⁾

- (1) a. お手洗いは階段をあがった2階になります。
b. お手洗いは階段をあがった2階です。
(2) a. こちらのお品は1万円になります。
b. こちらのお品は1万円です。

例えば(1a)では、「お手洗いの位置がそれまでとは異なって2階に移動する」という意味の通常の変化の局面を述べたものとして解釈することも可能であるし、(2a)は「お品」の値段が変更されるという解釈も可能である。しかし、それらの解釈ではなく、(1b)の「2階です」というのとさほどの意味の違いが感じられない、(2b)の「1万円です」というのとさほど大きな意味の違いが感じられない、そのような「非変化」の解釈も可能である。

英語で変化を表す動詞の1つに *turn* があるが、(3)のようにすべて対象物の変化を表す。

- (3) a. *Caterpillars turn into butterflies.*
毛虫は蝶に変わる。
b. *turn from bad to worse*
ますます悪化する。
c. *The milk turned sour.*
ミルクがすっぱくなった。
d. *The leaves turned yellow.*
木の葉が黄色になった。

e. *My father was turning gray.*

父は白髪になりつつあった。

f. *The shower turned cold.*

シャワーが冷たくなった。

g. *John started out a music student before he turned linguist.*

ジョンは最初は音楽専攻の学生だったが言語学に変わった。

(『大修館ジーニアス英和辞典(第4版)』)³⁾

- (4) a. 毛虫→蝶
b. 悪い状態→一層悪い状態
c. ミルクの良い状態→腐った状態
d. 緑の葉→黄色い葉
e. 黒い髪→白髪
f. 湯→水
g. 音楽専攻→言語学専攻

しかし、ここに *out* が付いて *turn out* となると、この「変化」が曖昧になる。(5)のように「変化」を表すこともあるが、(6)のように「非変化」を表すと解釈される場合も多い。

(5) *What an amazing woman she'd turned out to be.*

(D. Steel, *No Greater Love*:167)

(6) *To our surprise, the stranger turned out to be an old friend of my mother's.* (*Longman Dictionary of English Language and Culture*)⁴⁾

(5)の場合、彼女は何と素晴らしい女性になったことだろうというように、「彼女」が成長する「変化」が考えられる。しかし、(6)では *stranger* 「見慣れぬ人」が「母の旧友」に変わるわけではない。「見慣れぬ人」は元々、母の友人なのであって、そのことに変わりないのである。

(7) a. 少女 → 変化 → 女性

b. 見慣れぬ人 → ×変化 → 母の旧友

英語の *turn out* が「非変化」を表す場合、日本語の「非変化」のナルと共通する特性を備えているのだろうか。あるいは相違点があるのだろうか。本稿では、この点について考察し、そこからナルと *turn out* の特性について認識を深めていきたいと思う。

2. 「非変化」のナル

2.1. 2つの「非変化」のナル

佐藤(2003:189f.)は、「非変化」のナルをその振る舞いの違いに応じて、2つの異なるタイプに分けている。1つは、「計算的推論」のナルで、(8)－(10)のようなものである。

(8) a. 彼は66年の早生まれなので、私と同じ学年になる。

b. 彼は66年の早生まれなので、私と同じ学年にならない。

(9) a. 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞になる。

b. 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞にならない。

(10) a. このあたりは葛飾区になる。

b. このあたりは葛飾区にはならない。

このナルの特徴として、否定の形式になじむこと、丁寧体の形式を伴う必要がないことが挙げられる。これに対して、もう1つのナルは先に挙げた(1a), (2a)のような場合で、その特徴として、(11), (12)に示すように、否定の形式になじまない、丁寧体の形式を伴わないと不自然である、聞き手に対してごく丁寧な態度で述べる際に使われるということが挙げられる。

(11) a. こちらはお手洗になります。

b. *こちらはお手洗いにならないです。

c. ?ここはお手洗いになる。(「お手洗いだ」という意味で)

(12) a. このお品は1万円になります。

b. *このお品は1万円にならないです。

c. ?この品は1万円になる。(「1万円だ」という意味で)

このタイプのナルは、丁寧体の形式を伴わないと不自然であることから、佐藤はこのタイプを「対人的行為」のナルと呼んでいる。

佐藤(2003:191)に拠れば、「対人的行為」のナルは聞き手に関与する事柄でないと用いられない。

(13) (何の係をやっているのかと問われて) 私はレクレーション係 {?になります／です}.

(14) (事務員が教員に対して記念式典での役割分担を告げる場合) 先生の今日のご担当は A 会場の受付係 {になります／です}.

聞き手である教員が関与する(14)のナルはよいが、話し手に関係する(13)のナルはおかしい。

(15) (レストランの店長と店員の会話)

店長: 「3番テーブルのお客様の注文, 何だっけ?」

店員: 「日替わりの A セット {??になります／です}.

(16) (レストランの店員の客に対する発話)

お待たせいたしました. 日替わりの A セット {になります／です}.

(15)のように、ナルが話し手でも聞き手でもない第三者に関与する場合もやや不自然である。一方、(16)のように聞き手に関与する事柄であれば落ち着きがよくなるのである。

また、「対人的行為」のナルは話者の側に責任のあることを述べる状況で使われる(cf. 佐藤(2003:193)).

- (17) a. (新幹線に乗り合わせた客同士の会話)
 乗客 A : 「食堂車はどこでしょうかね？」
 乗客 B : 「食堂車は隣の車両 {??になります／です}.」
- b. (新幹線の乗務員と乗客の会話)
 乗客 : 「食堂車はどこでしょうかね？」
 乗務員 : 「食堂車は隣の車両 {になります／です}.」
- (17) a. (レストランで食事をしている客同士の会話)
 客 A : 「ここのランチセットはいくらですか？」
 客 B : 「900円に {??になります／です}.」
- b. (レストランの客と店員の会話)
 客 : 「ここのランチセットはいくらですか？」
 店員 : 「900円に {になります／です}.」

(17a)では乗客同士の会話であるため、述べられている事柄は特にどちらに責任があるわけでもない。このような状況の下では対人的行為のナルの使用は不適切である。他方、(17b)のように乗務員の側に責任のあることが述べられている場合は、ナルの使用は適切になる。(18a)と(18b)の対比でも同様のことが言える。

更に、佐藤(2003 : 193)は、「対人的行為」のナルは聞き手にとっての都合の良さを積極的にアピールする文脈では使いにくいということを指摘している。

- (19) (合格の結果の問い合わせに対して)
- a. 残念ですが山田さんは不合格 {になります／です.}
- b. おめでとうございます。山田さんは合格 {??になります／です.}

(19a)のように聞き手にとって都合の良くない状況ではナルは適切だが、(19b)のように聞き手に都合のよい状況ではナルは不適切になるというのである。

2.2. ナルの意味原理

佐藤(2003:197)は、ナルはある結果に到達する局面に主たる関心があるもので、その結果に至らしめた存在やプロセスに対しては関心の薄い動詞であり、例えば(20)では、ナルを使用することによって発話主体である自分自身を背景化させ、相手との直接的な摩擦を回避させ、結果として「和らげ」の効果を生じさせていると述べている。

- (20) 君がそんな態度だから、私だって厳しいことを言うことになるんだよ。

ちなみに、(20)のナルは、「なるんだよ」と丁寧体ではないことから、先に見た「対人的行為」のナルとは違うものと思われる。何らかの枠組みに照らし合わせて計算、推論をするということでもないから、「計算的推論」のナルでもない。物の変化を表すナルではないが、上述のどちらにも入らないと思われる。

池上(2006:175f.)は、(21)の例を挙げ、下記のように述べている。この(21)は、(20)と同じタイプのナルと思われる。⁵⁾

- (21) (結婚の予定を人に知らせて)
- a. “We are getting married.”
- b. 「私たちは結婚することになりました。」

(21b)は結婚式への招待状によく用いられる表現である。結婚は両性の合意で決まるわけであるから、実際には(21a)の英語の表現と同じように「私たちは結婚します」と言えばよいであろうが、そのように表現すると何か2人の決意があまりにも強く打ち出されていると感じられ、とくに目上の人への文面としては礼を失しているとも考えられるのであろう。(21b)のように、そこにナルが添えられると、実際には当事者の意志に基づいての行為であっても、あたかもことが当事者の意図を超えたところ

ろでの〈成り行き〉でそのように運んでしまったという意味合いになり、当たりのきつさが消せるということであろう。もちろん、英語の *become* には同じような補助動詞的な使い方はない。当事者の意志決定に基づく主体的な行為をいわばナルによって包み込むことによって当事者の主体性を薄める—こういう意味は、話題となる人物への直接的な指示を避けるという敬語の要件にも適している。そのことから、日本語ではナルは敬語表現でも大変活躍している。たとえば次のような場合である。

- (22) a. 天皇は自ら杉の苗をお植えになりました。
 b. 天皇陛下におかせられましたは、自ら杉の苗をお植えになりました。

行為者としての天皇のイメージは(22a)でも述語動詞ナルが添えられることによってすでに薄められているが、さらに(22b)のようになると天皇が〈場所〉として表示される—つまり、「天皇におかせられましたは」＝〈天皇という場においては〉—ということになり、文全体は〈天皇〉という場において、杉の苗を植えるという行為が生じたという把握の仕方で事態を提示し、それによって天皇の行為者としての意味合いが消去される。ちょうど自発の意味合いで用いられる「(ら)れる」が敬語表現でしばしば用いられる(たとえば「天皇は杉の苗を植えられました」)のと同じように、ナルも〈(当事者の意志とは関係なく)おのずからそうなる〉といった意味合いで、「殿様がお出でになる」、「お殿様のお成り」といったあたりから「全部で2000円になります」(英語の “That’ll be two thousand yen.” とした表現を参照)といったあたりまで、いろいろなレベルで敬語表現として重用されている。

さて、(21b)、(22)を池上は敬語として扱っているが、これらは「対人的行為」のナルになるのだろうか。(21b)は、結婚式の通知であるから、「結婚することになりました」と、丁寧体になっているが、

違う文脈でなら、例えば日記の中で「私たちは結婚することになった」と書くことはあるのではないか。丁寧体を用いずとも、池上の言う「事態が当事者の意図を超えて成り行きでそうなったという表現」であることに変わりはない。(22)も、文脈によっては「お植えになった」と、ナルの部分は丁寧体でなくてもよい。その場合、当事者の意図を背景化した婉曲表現ながらナルの部分が丁寧体になっていないので、「対人的行為」のナルにはならないし、計算や推論の関わることではないから、「計量的推論」のナルにもならない。

(20)－(22)のナルと「対人的行為」や「計量的推論」のナルとの違いとして他にどのようなことが考えられるのだろうか。

それは、(20)－(22)のナルは、「対人的行為」や「計量的推論」のナルの場合に考えられるように、「お手洗いはどこか?」、「この品はいくらか?」、「彼はどの学年か?」、「『かみつく』は何動詞か?」、「葛飾区は何区か?」、「今日の役は何か?」、「Aセットはどれか?」、「食堂車はどこか?」、「ランチセットはいくらか?」、「山田さんの合否はどうか?」というような「問い」に答えを出すものではないということである。(20)－(22)の場合は、こんなことになったのだと、1つの事態を提示するのみである。その点が、「対人的行為」や「計量的推論」のナルと大きく違う。

もう1つ違う点は、「結婚することになった」の例で考えれば分かりやすいと思うが、ここには結婚に至った「過程」、「時間的変化」が考えられるということである。ここが、「こちらがお手洗いになります」や「ここは葛飾区になる」のように、何ら時間的変化がない場合との違いである。

池上は、英語の *become* には日本語のナルのような補助動詞的な用法はないと述べていたが、*turn* の場合も *turn* だけでは補助動詞的な用法はない。しかし、本稿で取り上げる *turn out to* 不定詞になると、「結局、何々になった(であった)」と、補助

動詞的に用いられていると言える。

それでは、「非変化」のナルと turn out について比較しながら考察していこう。

3. ナルとTurn Out

3.1. 「対人的行為」のナルとTurn Out

先ず、次の例に見られるように、turn out は否定辞 not と共起する。それは、(23)のように turn を否定する場合もあれば、(24)のように to 不定詞を否定する場合もあるが、raising verb と同様にどちらの場合も意味に大きな違いはないと考えられる((23), (24)の各例の下線は筆者による)。

(23) a. Quieting the country did not turn out to be as easy as he predicted.

(Wordbanks, ukbooks0020)⁶⁾

b. However, this did not turn out to be such a cheap solution at all. (BNC, AS4)⁷⁾

(24) a. They also reduce the number of women recalled for further tests who turn out not to have cancer but are needlessly alarmed.

(Wordbanks, times0002)

b. Equally there is always something grammatical about delirium — the nonsense-language of the mad turn out not to be a merely random collocation of sounds. (BNC, J7U)

このように否定と共起するという点で、turn out は「対人的行為」のナルとは異なる。また、そもそも上掲の例からも分かるように、turn out は「地の文」に出現しているのであり、「会話」で用いられているわけではなく、丁寧というような敬語的な機能が turn out にあるとは考え難い。

では、否定文と共起するとされる「計算的推論」のナルとの違いはどうだろうか。

3.2. 「計算的推論」のナルとTurn Out

「計算的推論」のナルには、その名称が示す通り何らかの計算、推論が関わっている。

(25) a. 彼は66年の早生まれなので、私と同じ学年になる。 (=8a))

b. 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞になる。 (=9a))

c. このあたりは葛飾区になる。 (=10a))

(25)の各例では、「同じ学年になる」、「他動詞になる」、「葛飾区になる」と判断する計算、推論が関わっている。それらは、たとえ長く時間を要することではなくすぐ分かることであるとしても、生年から計算する、あるいは三上の枠組みや行政区間に照らし合わせる「間」があるはずである。また、これらには、必ず計算、枠組みの基準があると言えよう。しかし、turn out の場合は、次に示すように、そのような計算、推論ではなく、今、知覚されたばかりの事態を表す場合がある。

(26) But the tunnel was quiet as the grave, and the first unexpected sound they heard was a loud crunch as Ron stepped on what turned out to be a rat's skull.

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*:325)

(27) Professor Flitwick, the Charms teacher, had already decorated his classroom with simmering lights that turned out to be real, fluttering fairies.

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*.: 206)

(28) Filch found them trying to force their way through a door which unluckily turned out to be the entrance to the out-of-bounds corridor on the third floor.

(J. K. Rowling, *Harry Potter and Philosopher's Stone*:145)

(26)では、踏んづけたものが何かと思って見れば鼠の頭蓋骨であった。(27)では、きらめく光が何かと思って見れば、ひらひら飛び回っている妖精たちであった。(28)は、開けようとした扉が、見れば立ち入り禁止廊下の入り口だったということである。これらは、今、知覚された事態ということであって、計算すればこうなるということではなく、時間の経過をほとんど伴わない一瞬のことである。これらは、知覚されたままを述べているのであって、何かの「基準」に照らし合わせればこうだったということではない。

(26)－(28)の場合、日本語に訳す場合、「鼠の頭蓋骨になった」、「妖精になった」、「立ち入り禁止の廊下の入り口になった」というようにナルを入れると、おかしくなる。「鼠の頭蓋骨」、「妖精」、「立ち入り禁止廊下の入り口」というのは、その場にいる人たちがそう知覚したということで、そのようなものに何かの変化したというわけではない。ここでナルを用いれば、物の変化が想起されることになってしまう。

もちろん、すべての turn out が一瞬の知覚を表すというわけではない。たとえば、ある「計画」が結果的に「失敗した」のような場合は、ある程度の時間的経過が見込まれる。そのような場合、日本語に訳す際にナルが用いられることがある。例えば、次の例ではナルと turn out が対応している(下線は筆者による)。(29b)は(29a)の英訳である。

(29) a. その笛が果たして結果的に善となるか悪となるか、そいつを決定するのは私じゃない。

(村上春樹『海辺のカフカ(下)』: 454)

b. I'm not the one who decides whether that flute turns out to be good or evil. (trans. by Philip Gabriel, *Kafka on the Shore*: 569)

時間的経過があるときには、「時間の変化」という点でナルが馴染みやすくなるのだと考える。

4. 2つのTurn Out

変化過程という点で見れば、turn out は2種類に分かれる。(30)では、「見知らぬ人」が「母の友人になった」というのではなく、その人自身の「変化」は関わっていない。他者のその人に対する認識が変わったということである。

(30) To our surprise, the stranger turned out to be an old friend of my mother's. (=6)

以下の例も同様で、(31)では「一番みすばらしい格好の人」が実は「莫大な富の相続人」であったのであり、みすばらしい格好の人が富の相続人になったわけではない。(32)では、実は「父親が子供を殴っていた」ということが判明したわけで、「父親が殴るようになった」わけではない。(33)では、「嘆きのマートル」だと思っていたら「ハーマイオニー」だったということで、ここでも話者の認識は変わるが、「嘆きのマートルがハーマイオニーに変わる」わけではない。(34)でも、「砂糖」と思っていたものが実は「毒薬」だったということで、「砂糖が毒薬に変わった」わけではない。

(31) Sometimes the people who looked the least reputable or the most poverty stricken turned out to be the heirs of enormous fortunes. (D. Steel, *The Cottage*: 71)

(32) I had a case like that, a kid in the trauma unit who they claimed had been beaten up by a neighbor. They wanted to bring charges against him and they told a very convincing story. I was suitably outraged. Turns out the father was beating the child. (D. Steel, *The House on Hope Street*: 207)

(33) I thought at first it was Moaning Myrtle in there, but it turned out to be Hermione. (J. K. Rowling, *Harry Potter and the Half-Blood Prince*: 291)

- (34) She remembered putting something in her mistress's cocoa that turned out not to be sugar, but a lethal and little-known poison. (ibid.:410)

このような場合, (35a) – (35e) のように日本語でナルと訳すわけには行かない(cf. (30) – (34)). 原文の意味とは違ってしまう.

- (35) a. ?母の古い友人になった.
b. ?莫大な富の相続人になった.
c. ?父親が殴るようになった.
d. ?ハーマイオニーになった.
e. ?毒薬になった.

これに対して, 次のような turn out の例はどうか.

- (36) Like so many brilliant ideas, this one has turned out to be not so brilliant after all.

(Reader's Digest (2001, June):53)

- (37) But this simple thing turned out to be not so simple. (ibid.:94)

- (38) As Sam said, other people had babies at eighteen and survived it. Some of them even turned out to be decent parents. (D. Steel, *The Wedding*:344)

- (39) The seemingly harmless headache pill and the champagne had turned out to be a lethal mix. (D. Steel, *Second Chance* : 155)

- (40) She ran the local beauty school. She was a pretty woman, life just hadn't turned out the way she'd dreamed. She never expected to wind up alone at forty, with five kids. (D. Steel, *Johnny Angel* :8)

(36), (37) では「素晴らしいと思ったこと」, 「簡単に行くと思っていたこと」が実はそうならないということで, 最初思いついたアイデアが時間的経過を経て, その評価が変わっている(素晴らしい→そ

れ程でもない). (38) は, 「結果的に立派な親になる」ということだが, 「立派な親」が最初から存在するのではなく, 子育ての経過と共にそのように評価されるものである. (39) も, 「頭痛薬」と「シャンペン」が混ぜ合わさって「とんでもないもの」になったということで, 物の変化が関わっている. (40) は, 「人生が思うようにならなかった」ということで, 時間に伴う人生の展開を表している. このように, 「変化」, 「時間を経る経過」が関わる場合は, 次のように日本語でナルと言ってもよいと思われる(cf. (36) – (40)).

- (41) a. そんなに素晴らしいことにはならなかった.
b. そう簡単なことにはならなかった.
c. 立派な親になる.
d. 致命的な混ぜ合わせになった.
e. 思っているようにはならなかった.

逆に, 先に見たように, 対象自体が変わらない場合の turn out はナルと訳すことができない. しかし, そのような turn out でも, 別の意味での「変化」は考えられる. それは, 話者の対象に対する「認識の変化」である.

- (42) a. その人は見知らぬ人である.
↓ (認識の変化)
その人は母の旧友である.
b. その人は貧相な人である.
↓ (認識の変化)
その人は莫大な富の相続人である.
c. 殴っていたのは近所の人である.
↓ (認識の変化)
殴っていたのは父親である.
d. そこにいたのは嘆きのマートルだ.
↓ (認識の変化)
そこにいたのはハーマイオニーだ.
e. ココアに入れたのは砂糖である.

↓ (認識の変化)

ココアに入れたのは毒薬である.

但し、「認識の変化」と言っても、計算的推論のナルと異なるのは、turn out の場合は、何かの基準、枠組みにしたがって何らかの計算、推論をするというのではなく、自然に発覚した事を表しているという点である。

5. Turn Outとナルの伝達効果

4節で、turn out は「対象の変化」ではなく「(話者あるいは登場人物の)認識の変化」を表す場合があると述べたが、この「認識」は主観的な個人的な思い、考えではない。

その証拠に、例えば occur や seem の場合、次のように誰が思いついたのか、誰にとってそのように思われたのかということが to me のように示される。これは、occur の場合、義務的で必ず必要であり、seem の場合は義務的ではないが、(44)のように出てくる場合も多いと思われる。

(43) It never occurred to me to live with my first husband.

(BNC, CB8)

(44) He seemed to her to be extremely ancient.

(BNC, A68)

前置詞 to で誰にとっての認識なのかが明らかにされるということは、それが客観的な事実ではなく、その人物にとっての認識であるということを表している。

これに対し、turned out to me (him, her)を検索してみると BNC, Wordbanks のどちらのコーパスにおいても1件も検出されない。これは、to me のような誰にとっての認識かということは、turn out の場合、言語化できないということである。つまり、turn out が表現するのは誰にとってもそうなのだと

いうことであり、その分、事態の客観性は高いと言える。主観的なことよりも客観的なことを「最早、変え難いこと」として我々は捉える。「気持ち」は変り得るが、「事実」は変らない。

また、turn out の場合、「結局、こうなった」と、最初に予想されていたことの結果がこれだと示されるわけである。必ずしも最初の予想(想定)は明示されるわけではないが、そのような場合でも turn out という表現を用いればこそ、「最初、思ったこと」と「結果的に分かったこと」の対比が組み込まれ、文に奥行きが与えられる(turn out と「予想」については田岡(2007, 第5章を参照)⁸⁾)そして、「事実の提示」の中で比べれば、後から出てきたことの方が「本当だ」、「最終的な結果だ」と取るのが人間の認知傾向である。結果的事態を示唆する turn out で表される事態は、「変え難い事実」という印象を与えることになる。

「非変化」のナルは、A→Bという物の変化ではなく、「お手洗いはどこ(x)ですか?」→「xは2階だ」、「ここは何区(x)ですか?」→「xは葛飾区だ」というように、xの値が出てくる。「結婚することになる」の場合は、「結婚するという事態(x)」が出現するということである。

同様に、turn out も、「これは何か(x)?」と思えば、「xである」というようにxが出現してくる。

この点で、「非変化」のナルと turn out は同じである。しかし、見てきたように、turn out をナルとは訳せない場合がある。それは、このxの「出現」のイメージが起こらない turn out の場合である。結局、ナルというのは、いろいろあったけれどもこうなったのだと、「過程」をほのめかす表現であり、一方、turn out は、過程よりも寧ろ、出てきた「結果」をアピールする表現だということではないかと考える。

「結婚します」ではなく「結婚することになりました」という表現には、当事者の意志ではなく成り行きでそうなったのだと、事態を婉曲に柔らかく表現するというだけでなく、いろいろあったけれ

ども、これが紆余曲折を経て辿り着いた最終的な答えなのだと、その事態をこれ以上、動かし難いことであるかのように表現する強さが感じられる。結果的事態を了承しろと言わんばかりに相手に示す、それがナルの見逃せない伝達効果だと言えよう。

6. まとめ

以上、一見、変化が関わっていないと思われる日本語のナルと英語の *turn out* について比較してみた。

(i) 対人的行為のナルと *turn out*

	対人的行為のナル	<i>turn out</i>
否定と共起	×	○
会話に限定	○	×

(ii) 計算的推論のナルと *turn out*

	計算的推論のナル	<i>turn out</i>
否定と共起	○	○
枠組みがある	○	×
時間的経過	×	△

(iii) 時間的経過を伴う場合の *turn out* はナルと訳すことが出来る。伴わない場合はナルと訳せばおかしくなる。

(iv) ナル, *turn out* とともに、「これは何か、どうなったか(x)」の答えになるようなものを示している。

参考文献

- 1) 池上嘉彦 ; 『「する」と「なる」の言語学』, 東京 : 大修館書店, (1981).
 - 2) 佐藤琢三 ; 「ナルの文の発話と対人的行為」, 『現代日本語の語彙・文法』(草薙裕編), 東京 : くろしお出版, pp.185-201, (2003).
 - 3) 小西友七 ; 『ジーニアス英和辞典』(第4版), 東京 : 大修館書店, (2006).
 - 4) *Longman Dictionary of English Language and Culture*; London: Longman. (1992).
 - 5) 池上嘉彦 ; 『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』, NHK Books, (2006).
 - 6) Wordbanks Online.
 - 7) British National Corpus Online (BNC Online).
 - 8) 田岡育恵; 『英語表現の形式における矛盾と伝達効果』, 東京 : 英宝社, (2007).
- 例文の引用出典(小説・評論)
- Gabriel, Philip; *Kafka on the Shore*, London: Vintage, (2005) (村上春樹 ; 『海辺のカフカ』, 新潮文庫, (2005)).
- Morgan, Nick; “When I Started Turning Green,” *Reader’s Digest* (June), pp.92-97, (2001).
- Rowling, J. K.; *Harry Potter and the Philosopher’s Stone*, London: Bloomsbury Publishing, (1997).
- Rowling, J. K.; *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, London: Bloomsbury Publishing, (1998).
- Rowling, J. K.; *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, London: Bloomsbury Publishing, (1999).
- Rowling, J. K.; *Harry Potter and the Half-Blood Prince*, London: Bloomsbury Publishing, (2005).
- Steel, Danielle; *No Greater Love*, London: Corgi Books, (1991).
- Steel, Danielle; *The Wedding*, New York: Dell Publishing., (2000).
- Steel, Danielle; *The House on Hope Street*, New York: Dell Publishing., (2000).
- Steel, Danielle; *Cottage*, London: Corgi Books, (2002).
- Steel, Danielle; *Johnny Angel*, New York: A Dell Book, (2003).
- Steel, Danielle; *Second Chance*, New York: Delacorte Press, (2004).
- Stewart, Lucretia; “Smart Talking,” *Reader’s Digest* (June), pp.53-54, (2001).